

6 3 6 1 - 1 8 9
平成 1 8 年 2 月 2 3 日

各関係機関の長
各病害虫防除員 殿

宮崎県病害虫防除・肥料検査センター所長

平成 1 7 年度病害虫発生予報第 1 1 号について
平成 1 7 年度病害虫発生予報第 1 1 号を発表したので送付します。

平成 1 7 年度病害虫発生予報第 1 1 号

向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。
発生予報の概要

作物名	病害虫名	発生量の 平年比	記載ページ
早期水稲	スクミリンゴガイ	やや多	2
冬春キュウリ	うどんこ病	並	2
	べと病	並	2
	灰色かび病	並	3
	褐斑病	やや多	3
	ミナミキイロアザミウマ	やや少	3
コナジラミ類	やや多	3	
冬春ピーマン	うどんこ病	並	4
	斑点病	並	4
	ミナミキイロアザミウマ	並	4
	ヒラズハナアザミウマ	少	4
	コナジラミ類	前年より少ない	4
	黒枯病（仮称）	前年より少ない	4
冬春トマト	葉かび病	多	5
	灰色かび病	やや多	5
	コナジラミ類	並	5
	トマト黄化葉巻病（TYLCV）		5
冬春イチゴ	うどんこ病	やや多	5
	灰色かび病	並	6
	ハダニ類	多	6
	アブラムシ類	やや多	6
カンキツ	ミカンハダニ	並	6
茶	カンザワハダニ	やや多	7

平成 1 7 年度病害虫発生予察注意報第 1 3 号（H18.2.22発表）参照
作物の生育状況（2月中旬）

冬春キュウリの促成栽培、冬春ピーマン、冬春トマト、冬春イチゴは収穫期であった。

3月の気象予報

平年に比べて曇りや雨の日が多く、気温は「高い」、降水量は「平年並」か「多い」、日照時間は「平年並」か「少ない」と予想されています。

（1か月予報 鹿児島地方気象台 2月17日発表）

発生予報の根拠および防除対策

早期水稲

1. スクミリンゴガイ (やや多)

[予報の根拠]

- 1) 水稲収穫後の未耕起水田(佐土原町)での2月下旬の㎡当り総貝数11.3頭(平年7.8頭)はやや多、生貝率48.9%(平年55.8%)は平年並である。
- 2) 用水路での㎡当り総貝数59.0頭(平年31.6頭)は平年より多、生貝率83.1%(平年60.4%)は平年よりやや多である。

[防除上の注意]

- 1) 水田に生息する貝は、耕耘により破砕し防除する。この場合、土壌が硬いほど、耕耘ピッチが小さいほど、貝が大きいほど殺貝効果が高い。耕耘する深さは殺貝効果にあまり違いがないので、貝が主に越冬生息している土壌表層部を細かく耕耘するのが有効である。
- 2) 用排水路からの侵入を防ぐため水の出入り口にネットを設置する。
- 3) 田植後2~3週間はできるだけ水深1cm以下の浅水管理とする。
- 4) 貝の生息が多い場合には、薬剤の育苗箱施用と本田施用を実施する。

冬春キュウリ

1. うどんこ病 (並)

[予報の根拠]

- 1) 促成栽培では、2月中旬の発生面積率53.9%(平年39.8%)は平年よりやや多、発病葉率6.3%(平年6.2%)は平年並である。
- 2) 半促成栽培では発生未確認である。

[防除上の注意]

- 1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので発病を確認したら早めに防除する。
- 2) 耐性菌を生じやすいので系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。
- 3) 乾燥時に発生が多くなるのでほ場が過乾燥にならないように管理に注意する。
- 4) 半促成栽培でも急速に病勢が進展することがあるので促成栽培と同様の注意が必要である。

2. ベと病 (並)

[予報の根拠]

- 1) 促成栽培では、2月中旬の発生面積率77.0%(平年80.1%)、発病葉率22.8%(平年22.4%)はいずれも平年並である。
- 2) 半促成栽培では発生未確認である。
- 3) 1か月予報では、平年に比べて曇りや雨の日が多く、降水量は「平年並」か「多い」と予想されている。

[防除上の注意]

- 1) 多湿条件で発生しやすく、発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、予防散布に重点をおき発生が見られたら初期防除を徹底する。
- 2) 肥料切れや草勢の衰えは発生を助長するので、肥料切れしないように肥培管理に注意する。

3. 灰色かび病 (並)

[予報の根拠]

- 1) 促成栽培では、2月中旬の発生面積率7.7% (平年27.1%)、発病果率0.2% (平年1.5%) はいずれも平年よりやや少ない。
- 2) 半促成栽培では発生未確認である。
- 3) 1か月予報では、平年に比べて曇りや雨の日が多く、降水量は「平年並」か「多い」と予想されている。

[防除上の注意]

- 1) ハウス内が多湿にならないように換気や灌水に注意する。
- 2) 予防及び発病初期の防除を徹底する。
- 3) 耐性菌が発生しやすいので系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

4. 褐斑病 (やや多)

[予報の根拠]

- 1) 促成栽培では、2月中旬の発生面積率38.5% (平年36.1%) は平年並、発病葉率13.3% (平年6.5%) は平年よりやや多である。
- 2) 半促成栽培では発生未確認である。
- 3) 1か月予報では、平年に比べて曇りや雨の日が多く、気温は「高い」、降水量は「平年並」か「多い」と予想されている。

[防除上の注意]

- 1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、初期防除を徹底する。
- 2) 窒素質肥料の多用は発病を助長し、過繁茂になって通風を妨げるので適正な肥培管理に努める。

5. ミナミキイロアザミウマ (やや少)

[予報の根拠]

- 1) 促成栽培では、2月中旬の発生面積率0.0% (平年13.3%)、葉当り虫数0.0頭 (平年0.4頭) でいずれも平年よりやや少ない。
- 2) 半促成栽培では、発生未確認である。

[防除上の注意]

- 1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、低密度のうちに防除する。

6. コナジラミ類 (シルバーリーフコナジラミ, タバココナジラミ バイオタイプQ) (やや多)

[予報の根拠]

- 1) 促成栽培では、2月中旬の発生面積率38.5% (平年18.7%)、百葉当虫数6.8頭 (平年2.9頭) はいずれも平年よりやや多い。
- 2) 半促成栽培では、2月中旬の発生面積率20.0% (平年0.0%)、百葉当虫数2.0頭 (平年0.0頭) はいずれも平年よりやや多い。

[防除上の注意]

- 1) 気温の上昇とともに発生する恐れが多いので早期発見に努める。
- 2) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、低密度のうちに防除する。
- 3) 施設栽培では防虫ネットを必ず設置するとともに、光反射マルチや近紫外線カットフィルム、黄色粘着板等の物理的防除手段を利用する。
- 4) シルバーリーフコナジラミとタバココナジラミ バイオタイプQの形態上の差異は成虫、幼虫ともに確認されておらず、両種の肉眼での区別は困難である。
- 5) タバココナジラミ バイオタイプQに効果のある殺虫剤が少ないことから、薬剤散布後は防除効果に注意を払い、必要に応じて適宜追加防除を行う。
- 6) 有効な薬剤に対する抵抗性の発達を回避する観点からも同一薬剤の連用は極力行わず、より一層ローテーション散布を心がける。また、抵抗性発達の可能性が低い

ボタニガード乳剤等の微生物農薬や粘着くん液剤等のコナジラミを物理的に窒息死させる薬剤を防除体系に組み込む。

冬春ピーマン

1. うどんこ病 (並)

[予報の根拠]

- 1) 2月中旬の発生面積率38.5% (平年40.5%)、発病葉率3.1% (平年4.1%) はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- 1) 乾燥した条件で発生しやすいので、乾燥させすぎないようにする。
- 2) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので発病を確認したら早めに防除する。

2. 斑点病 (並)

[予報の根拠]

- 1) 2月中旬の発生面積率15.4% (平年34.5%) は平年よりやや少、発病葉率1.4% (平年3.6%) は平年並である。

- 2) 1か月予報では、平年に比べて曇りや雨の日が多く、降水量は「平年並」か「多い」と予想されている。

[防除上の注意]

- 1) ハウス内が高湿多湿にならないように、換気と水管理に注意する。また、整枝を行って茎葉が過繁茂にならないようにする。
- 2) 病原菌が植物体に侵入した後の防除効果は低いので、予防散布を行う。

3. ミナミキイロアザミウマ (並)

[予報の根拠]

- 1) 2月中旬の発生面積率30.8% (平年30.1%)、10花当り寄生虫数0.3頭 (平年1.2頭) はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- 1) 一部のほ場ではわずかに発生が見られ、今後温度の上昇とともに例年増加していく時期であるので注意が必要である。
- 2) 10花当り寄生虫数が1頭から被害果が出始める。また発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、低密度のうちに防除を徹底する。

4. ヒラズハナアザミウマ (少)

[予報の根拠]

- 1) 2月中旬の発生面積率0.0% (平年16.4%)、10花当り寄生虫数0.0頭 (平年5.2頭) はいずれも平年より少ない。

[防除上の注意]

- 1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、低密度のうちに防除を徹底する。

5. コナジラミ類 (外コナジラミハイタフQ) (前年より少ない)

[予報の根拠]

- 1) 2月中旬の巡回調査では発生未確認である。(前年同期の発生面積率30.0%、百葉当たり虫数5.5頭)

[防除上の注意]

冬春キュウリ コナジラミ類の項参照。

6. 黒枯病 (仮称) (前年より少ない)

[防除上の注意]

- 1) 2月中旬の巡回調査では発生未確認である。(前年30.0%)
- 2) ほ場内が多湿条件にならないよう、排水を良好にするとともにマルチなどを行う
- 3) 被害茎葉、果実は伝染源となるのでほ場外に持ち出し、適切に処理する。
- 4) 1か月予報では、平年に比べて曇りや雨の日が多く、降水量は「平年並」か「多い」

と予想されている。今後、気温の上昇に伴い発病に好適な環境になるので注意する。

冬春トマト

1. 葉かび病 (多)

平成17年度病害虫発生予察注意報第13号(H18.2.22発表)参照

[予報の根拠]

- 1) 2月中旬の発生面積率46.2%(平成9.2%)、発病葉率11.5%(平成0.7%)は平成より多い。
- 2) 1か月予報では、平年に比べて曇りや雨の日が多く、降水量は「平成並」か「多い」と予想されている。

[防除上の注意]

- 1) 多湿条件で発生しやすいので、ハウスの換気を良くする。
- 2) 発病初期の防除を徹底する。

2. 灰色かび病 (やや多)

[予報の根拠]

- 1) 2月中旬の発生面積率15.4%(平成6.2%)は平成よりやや多、発病果率0.3%(平成0.2%)は平成並である。
- 2) 1か月予報では、平年に比べて曇りや雨の日が多く、降水量は「平成並」か「多い」と予想されている。

[防除上の注意]

- 1) 低温多湿条件で発生しやすいので、日中の換気、夜間の加温等で湿度低下をはかり、曇雨天日には加温機の送風を作動させる等、結露防止に努める。
- 2) 花弁の発病に注意し、初期防除を徹底する。なお、薬剤耐性菌が出現しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

3. コナジラミ類(シバ-リ-コナジラミ、外コナジラミ、イタイQ) (並)

[予報の根拠]

- 1) 2月中旬の巡回調査では発生面積率7.7%(平成35.1%)、百葉当たり虫数0.1頭(平成1.7頭)はいずれも平成並である。

[防除上の注意]

- 1) 冬春キュウリのコナジラミ類の項参照。
- 2) いずれもトマト黄化葉巻病を媒介するので、後述の「4. トマト黄化葉巻病(TYL CV)」を参考に防除を徹底する。

4. トマト黄化葉巻病(TYL CV)

[防除上の注意]

- 1) 黄色粘着トラップ等を設置し、コナジラミ類(媒介虫)の早期発見に努めるとともに、栽培期間中を通して防除を徹底し、本虫の密度を抑制する。
- 2) 施設内外の雑草はコナジラミ類の寄主となるので除草を徹底する。また、施設内では栽培目的以外の不要な作物や観葉植物等は栽培しない。
- 3) 発病株は伝染源になるので、根ごと抜き取り、土中に埋めるかビニル袋に入れて枯れるまで密閉する。ウイルスは植物全体に存在しているので発病部位を除去しても伝染源になるため、必ず株全体を除去する。

冬春イチゴ

1. うどんこ病 (やや多)

[予報の根拠]

- 1) 2月中旬の葉での発生面積率24.9%(平成27.0%)は平成並、発病葉率4.

2%（平年1.9%）は平年よりやや多い。

- 2) 果実での発生面積率16.7%（平年14.4%）は平年よりやや多、発病果率0.5%（平年0.7%）は平年並である。

[防除上の注意]

- 1) 葉裏に発生しやすいので早期発見に努め、初期防除を徹底する。
- 2) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、予防に重点をおき、発病後は散布間隔を短くするなど発病初期の防除を徹底する。
- 3) 発病果など被害部は伝染源になるので早めに取り除きほ場内に放置しない。

2. 灰色かび病（並）

[予報の根拠]

- 1) 2月中旬の巡回調査では発生未確認である。
- 2) 1か月予報では、平年に比べて曇りや雨の日が多く、降水量は「平年並」か「多い」と予想されている。

[防除上の注意]

- 1) 多湿条件で発生しやすいので、換気をはかると同時に、薬剤散布、灌水にあたっては施設内の空気湿度を高めないように留意する。
- 2) 病果や病葉は早めに摘除してほ場内に放置しない。
- 3) 薬剤耐性菌が出現しやすいので系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

3. ハダニ類（多）

[予報の根拠]

- 1) 2月中旬の発生面積率41.7%（平年42.1%）は平年並、寄生株率14.7%（平年9.3%）は平年よりやや多である。

[防除上の注意]

- 1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、低密度時から防除を徹底する。
- 2) 株整理後の葉数が少なくなった時期に薬剤散布を行うと防除効果が高くなる。茎葉繁茂時には散布圧を強めて、葉裏に良くかかるように散布する。
- 3) 薬剤抵抗性が発達しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

4. アブラムシ類（やや多）

[予報の根拠]

- 1) 2月中旬の発生面積率50.0%（平年14.0%）は平年より多、寄生株率2.3%（平年1.2%）は平年よりやや多である。

[防除上の注意]

- 1) 発生が多くなると防除効果が上がりにくいので、低密度時から防除を徹底する。
- 2) 株整理後の葉数が少なくなった時期に薬剤散布を行うと防除効果が高くなる。茎葉繁茂時には散布圧を強めて、葉裏に良くかかるように散布する。
- 3) 薬剤抵抗性が発達しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

カンキツ

1. ミカンハダニ（並）

[予報の根拠]

- 1) 2月中旬の発生面積率45.0%（平年45.9%）、寄生葉率7.6%（平年9.0%）はいずれも平年並である。

[防除上の注意]

- 1) 越冬密度の高いほ場や冬季マシン油乳剤を散布できなかったほ場では、春季（3月上～中旬、萌芽前）にマシン油乳剤による防除を行う。

茶

1. カンザワハダニ (やや多)

[予報の根拠]

1) 2月中旬の発生面積率は、摘採面では30.8% (平年34.7%) で平年並であるが、すそ部 (樹幹内部) では84.6% (平年57.4%) で平年よりやや多い。

[防除上の注意]

1) 防除適期は、増殖が始まる前の密度の低い時期 (3月上～中旬) で、株の内部やすそ部の葉裏に多く生息しているので、十分な薬液が到達するように丁寧に散布する。

その他

1 農薬適用の有無などについては次のホームページで確認する。

日本植物防疫協会ホームページ <http://jppn.ne.jp>

農林水産省ホームページ <http://www.maff.go.jp/nouyaku/>

農薬検査所ホームページ <http://www.acis.go.jp/>

2 農薬の使用に当たっては、農薬使用基準の遵守並びに危被害の発生防止に努める。特に水質汚濁性農薬ベンゾエピン剤 (商品名、マリックス乳剤、粒剤等) は使用しないこと。

3 発生量 (程度) の区分

多い	(高い)	やや多いの外側10%の度数の入る幅
やや多い	(やや高い)	平年並の外側20%の度数の入る幅
平年並		平年値を中心として40%の度数の入る幅
やや少ない	(やや低い)	平年並の外側20%の度数の入る幅
少ない	(低い)	やや少ないの外側10%の度数の入る幅

(平年値は過去10年間の平均)

4 予察情報の種類

病虫害防除・肥料検査センターから発表する情報は次の5つです。

1) 予報・・・向こう1か月の発生状況を予測し、毎月25日前後に発表する。

2) 注意報・・・主要な病虫害の多発生が予想され、かつ早めに防除が必要な場合に発表する。

3) 警報・・・主要な病虫害の大発生が予想され、かつ緊急に防除が必要な場合に発表する。

4) 特殊報・・・県内で初めて発生を認めた病虫害がある時や、病虫害の発生様相が特異な時に発表する。

5) 防除情報・・・注意をうながす必要がある病虫害の発生状況や、各種の防除技術指導情報について随時発表する。

お知らせ (<http://www.jppn.ne.jp/miyazaki/>)

病虫害防除・肥料検査センターでは、ホームページで情報を提供しています。予察情報の根拠となる地域別調査データ、防除対策等を掲載しています。ぜひご利用ください。

【 文書取扱 】

病虫害防除・肥料検査センター 櫛間

TEL:0985-73-6670 FAX:0985-73-7499

E-mail: byogaichu-hiryo

@pref.miyazaki.lg.jp